

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 復興支援 - 13

学校名・団体名	二本松市立石井小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	学び合う学びで探求的に学ぶ子どもの育成 ～心を育てる学習環境整備～

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 実施計画に至るまでの経緯

東日本大震災とそれに伴う原子力発電所事故から間もなく8年が経過する。復興・再生の歩み続ける福島県にある本校は、教育環境等の諸条件の整備や児童の体力、学力、心の問題等の大きな課題に取り組み、復興の原動力となっていく児童のたくましい成長に向けた教育の推進に力点を置いている。本校の学区には浪江町役場仮庁舎二本松営業所と仮設住宅が設置されており、現在、浪江町からの避難児童が2名在籍、校地内の除染作業は既に終了し、敷地内外の放射線量は通常の域を出ることはないものの、除染作業による表土入替に伴い、特に学級畑、花壇には山砂が入り、児童の栽培活動には適さない状態が今も続いている。

このような状況下で多方面にわたる方策をとっていきたい。

一つ目に学校教育の要である授業で児童を育てたい。昨年度も二本松市教育委員会の支援、大学教員等の講師招聘、年23回の授業研究を重ねたが、今年度も児童同士が学び合う学びの中で互いの存在を認め合い、共に課題を探求する姿を求める現職教育を継続する。

二つ目に音楽鑑賞会を開きたい。情操教育の目的に加え、会開催に至るまでに子どもたちに地域の人々との有機的な関わりをもたせたい。一例を挙げれば浪江町仮設住宅も含む学区内の全戸の家庭へ、学校紹介や教科で学習した夏季の体調管理への注意等を合わせた児童手作りの案内を配付する。そして共に音楽を鑑賞することで、地域との一体感をもつ一助としたい。三つ目に教育環境として作物が実る状況での栽培活動や緑ゆたかな環境をつくりたい。植物を育てたりその成果を味わったりして友達とともに学んだり生命の循環をとらえたりしたい。

このように校内の教育活動の充実はもとより教育活動を地域社会に開き、つながりを意図的にもつことが急務の課題であるとして計画立案した。

2 活動について

- (1) 研究主題 「学び合う学びで探求的に学ぶ子どもの育成」
～子どもの心を育てる働きかけ、環境整備を通して～

(2) 目的

被災した福島県において組織的、計画的に協働的な学習活動を行うために児童にバランスの取れた学習の場を提供することで、心ゆたかな児童を育てることができる。

(3) 年間実施報告

月	授業研究	地域とのふれあい	教育環境整備
4	・研究構想		畑、花壇の整備
5		・鑑賞教室の計画立案 ・鑑賞教室の招待状作成開始	・1, 2年さつまいもの苗植え
6	21日 公開研究授業 I 授業者 本田夏季教諭（2年国語科） 指導助言 麻布教育研究所長 村瀬公胤先生		・石井っ子バラ園整備（追肥等）計画 ・畑の手入れ作業

7	・授業実践	・鑑賞教室案内の学区内全戸(仮設住宅を含む)への配付 ・鑑賞教室招待状(うちわ)作成(5・6年)	・畑の手入れ作業
8		・社会福祉法人あだたら荘、菊の里へのプレゼント制作(6年)	
9		・5日 心を通わす音楽鑑賞教室(ハンマードルシマー演奏) ・あだたら荘・菊の里訪問の計画立案 ・6日あだたら荘・菊の里と交流(5年) ・27日6日あだたら荘・菊の里を訪問、交流(5年)あだたら荘の方へのうちわの配付(石井っ子発表会の招待)	
10	12日 公開研究授業Ⅱ 授業者 村松直子教諭(5年 道徳科) 指導助言 國學院大學教授 斎藤智哉先生	・仮設住宅の方を含む地域全戸へ招待状の作成配付(石井っ子発表会)5、6年 ・27日 石井っ子発表会	・さつまいもの収穫(1,2年、アウトドアクラブ)
11	19日 公開研究授業Ⅲ 授業者 酒井浩子教諭(4年 算数科) 指導助言 麻布教育研究所長 村瀬公胤先生		・さつまいもの収穫祭(1,2年、アウトドアクラブ)
12	・授業実践 ・研究のまとめ	・石井幼稚園との交流会計画(5年)	・石井っ子バラ園構想立案
1	↓ ・小学校教育研究会安達地区研究物展出品	・石井幼稚園交流会「わくわく ふれあいかい」実行(5年)	・材料、デザイン検討
2	・研究の振り返り、次年度の構想	・石井幼稚園から交流会へ招待(5年)	・看板製作
3	↓		・看板設置

3 発揮された効果

- 震災後7年目の本県で、児童が本事業の研究授業や問題解決的に取り組んだ体験的な活動、栽培活動等を通して友達との有機的な関わりをもちながら学んだり、豊かな環境の中で学んだり地域、地域社会と豊かに関わる機会をもったりすることができた。
- 本校全児童を対象にしたQU(「楽しい学校生活を送るためのアンケート」)の平成30年5月と12月の変容を各学級単位で見ると、全学級で向上している。友達との関わり合いについて、よりよい関係づくりが進み、児童の内面の育成を目指して図ることができたと考える。
- 児童の健やかな育成を図る機会において、周囲の大人が願いを一つにして取り組むことは震災後の福島県の復興の手立てとして有効である。年間を通して高齢者、幼児、障がいがある人、音楽家等々の多様な人々と関わることができた。それらから、児童が関わりを日々の中で個々の学校や家庭、地域の中で深めている。
- 地域に根ざす学校として、市町村、地域住民、各関係機関と連携を図った取り組みによるつながりを今後も継続していく。



【心を通わす音楽鑑賞教室】



【さつまいもができたよ】



【公開授業研究会】